

東京女子高等師範學校  
 日本幼稚園協會

# 幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第二十五卷 四月號 第四號

歌米の保育状況……………	上島直之
幼児の家庭……………	東京女子高師附屬幼稚園
表情遊戲「蓋音機」……………	土川五郎
幼児にきかせる話……………	水谷年惠
保育叢談……………	堀七藏
幼なきさ……………	臥雲
東京々高師幼稚園だより……………	啓
長編小説「兼ちやん」……………	岡田美津

茂木由子先生作曲  
萩原英一先生振付  
土川五郎先生

四六倍判箱入装幀頗る美本  
正價金二圓五十錢 送料十七錢

# 律動 遊戯 をささなごのうた

## 目 次

お 日 様  
お 日 様  
カ ケ ア ク ラ  
カ ケ ア ク ラ  
風 ケ ツ コ  
コ ケ ツ コ

付奏伴ノアビ

茂木先生の歌に萩原先生の曲、遊戯界の第一人者たる土川先生の振付と、三先生の御盡力で今迄に無い理想的遊戯教本が出来ました、各々多數の寫眞版を入れて表情の變化を理解し易く巧みに現してあります。

發 兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八十八番  
電話三〇四七番  
振替東京四六一一番

教 文 書 院

理學博士 山口銳之助先生  
文學博士 藤岡 勝二先生

監修 教文書院編輯部編纂

# カーレント學生參考書

最新ポケット型・ポイント活字採用・正價各冊金卅五錢・送料各二錢

現代學生知識の泉源!!  
豫習復習受験の要書!!

學生の良師となれ  
簡にして要を盡せ  
確實にして權威あれ  
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂の  
モットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正確なものが多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學博士山口銳之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各々専門家を分擔し銳意完成したる模範的良參考書にして、豫習、復習、受験に必要缺くべからざるものである。

- |      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 日本地理 | 外國地理 | 物理學  | 化學學  | 幾何學  | 代數學  | 日本文學 | 西洋史  |
| 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 |
| 東洋史  | 國文解釋 | 英文法  | 地理學  | 動物學  | 植物學  | 鑛物學  | 生理衛生 |
| 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 | 上下二冊 |

發行所

東京上野公園寛永寺坂下  
上根岸八十八番地

教文書院

(振替東京四六壹壹番)  
電話下谷三〇四七番

東京女子高等師範學校內  
日本幼稚園協會

# 幼 兒 の 教 育

幹

堀 七 藏



第 四 號

1925

第 二 十 五 卷



# 日本幼稚園協會編輯幼兒教育

會長

東京女子高等師範學校校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

贊助員

嚴谷秀雄

東洋大學教授

高島平三郎

東京女子高師教授

乙竹岩造

東京女子師範學校校長

龍山義亮

東京帝大醫科講師

醫博大田孝之

東京女子高師囑託

土川五郎

東京高師教授

文博大瀨甚太郎

帝國教育會理事

野口援太郎

慶應大學教授

醫博唐澤光德

松住高等學校校長

乘杉嘉壽

東洋幼稚園長

岸邊福雄

京都帝大教授

文博野上俊夫

早蕨幼稚園長

久留島武彦

東京女子高師教授

醫博弘田長

帝國教育會會長

文博澤柳政太郎

東京女子高師教授

文博倉橋惣三

東京高師教授

佐々木秀一

東京帝大教授

文博松村武雄

東京女子高師教授

文博下田次郎

東京帝大教授

文博松本亦太郎

東京女子高師教授

醫學士菅原教造

奈良女子高師校長

文博榎山榮次

醫學士富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

醫博三田谷啓

東京市地務課長

藤井利譽

東京高等學校校長

文博湯原元一

東京女子高師講師

藤五代策

東京帝大教授

文博安井哲子

長崎縣師範學校長

福士末之助

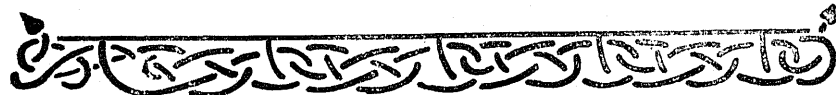
東京帝大教授

文博安井哲子

文博谷本富

日本女子大學長

文博安井哲子





第 四 第 育 教 の 兒 幼 卷 五 十 二 第

次 目

<p>小説『兼ちゃん』……………岡田美津…一六</p>	<p>東京女高師幼稚園だより……………醫 峰…一五</p>	<p>幼なぐさ……………臥 雲…一五</p>	<p>保育叢談……………一四</p>	<p>遊戯「蓄音機」……………土川五郎…一五</p>	<p>幼兒にきかせる話……………水谷年恵…一四</p>	<p>幼兒の家庭……………東京女子高等師範附屬幼稚園…一三</p>	<p>歐米の保育狀況……………上島直之…一四</p>
-----------------------------	-------------------------------	------------------------	--------------------	----------------------------	-----------------------------	-----------------------------------	----------------------------



## 歐米の保育狀況(二)

大阪市船場幼稚園長 上 島 直 之

### 四、文字數、を取扱ふ事

我國の幼稚園では、文字數を取扱ふ事を研究されて居るやうであるが、未が十分でないと思ふ。無理に文字、數を數へる事は勿論慎まねばならぬが、小供が之を知る事を要求する時に適當な方法で知らず知らずに覺へさす事は決して害あるのみならず望ましい事と思ふ。歐米では此方面には可なり進んで居るのである以下實例について述べる。

#### 1、ベルリンの幼稚園

厚紙に數字を金剛砂にて書きしものに指にて觸れてはその下に其數字の示す數丈け小石を列べる事。……これによれば知らず知らずに數字の形と數とを知る事が出来る。

同上アルハベットを書きしものに觸れて發音する。……アルハベットの形と發音とを知る。

切抜のアルハベットを並べて言葉を作る事。……發音を聽き分け言葉の綴を知る。

#### 2、ロンドンの幼學校

前述べた様に英國では學校並に取扱つて居るから、此方面は少しく進み過ぎた位である。それでも無理はないやうである。

教科を擧げて見ると、

ベビークラス(三歳—五歳)、遊戯、唱歌、御話、手工等。

上級、以上の他に讀方、書方、算術。机の排列も學技の如く、各種カード、繪畫、玩具等を使用して、自ら文字を習ひ、作文し、計算し得るやうに導く所は我國の幼稚園と異り、教ふる事を主とし、其教へ方を幼兒に適するやうにして居る。

〔ベビークラスの例〕

繪畫のカードと其繪の名稱の頭文字(アルハベットの切抜)とを合はす事。例へば傘の繪あればU、徳利の繪なればBと合はずが如し。

發音に伴ひて、切抜文字を並べて言葉を綴ること。

數字のカードと實物とを對照して加法を行ふこと。

$$\begin{array}{|c|} \hline 2 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 3 \\ \hline \end{array} = \begin{array}{|c|} \hline 5 \\ \hline \end{array}$$

〔上級〕

各兒の與へられたカードにより、算術、作文、讀方等をする。

〔作文の例〕

「犬に就ての話。」「汝の最も好む所の物に就て。」又「もし御前が御前でないならば、何になりたいと思ふか。」の如き困難な題も見當つだが何れも能力に應じてすらすら書いて居る。

〔算術は〕

四個の數の加算簡單な減法、乘法迄も進んで居るのがある。何れも實物と對照し得る様になつて居る。例へば八の二倍に於て豆を八個づゝ二個の箱に入れて、合して十六となる事を試し得る様に。

### 3、紐育ホレースマンの幼稚園

歐米の保育狀況(二)



此園では讀方、書方、數等を材料の中に入れて居る。

讀方……

讀方先生や兒童によつて話される物語を聽く。

先生や兒童の讀む話を聽く。

此等は讀方の興味を刺戟する。

詩歌、散文、物語等を繰り返へして讀む。

認知せしむるもの、(文字を自然に覚えさせ)

特別な書物の名稱。

書物中の物談の題。

材料入れ箱の名稱。

著音器レコードの名稱。

圖畫及他の作業に於ける印刷した又書いた名稱及頭文字。

繪畫の説明の印刷文字。

必要な告示の文字、……危険。觸るな。入るべからず。出口等。

簡単な 明のある繪本。

書方……

寫字。

思想を現はし、簡単な話を現はす爲に畫を くこと。

一定の字を寫すこと。等。

而して此等は多く黑板又は大な紙に大書して、全腕の運動を爲さしめて居る。

數……

下級では主として日常保育材料より數量的觀念を得しめ、特別な取扱は少い。

大さ、量の相違

兒童、椅子の大を比較する。

大小各種の物を持ちて遊ぶ。

ランチの時コップの水量に注意する。

〔時〕

一定の時に、或活動をなす事（例へば、園に來る時、ランチの時等實際上より時の基本觀念を得しめる。）

靴を早く換へよ等遲速を知らしめる。

〔數へる事〕

ランチの時にナフキンや皿を數へる。

作業する時に材料の數を數へる。

誕生日に年齢を言ふ。等。

上級では稍計畫的になる。

〔大さ、量の相違〕

適當な大さの椅子を見出す。

或仕事をする時其れに要する大約の量大さを探る等。

〔形の相違〕

種々の形の材料を以て作業する。

〔計る事〕

仕事の材料を計る。(例へば人形の着物、木工の時の木材)

兒童の體重を測る。

粗土細工の重さを手又は衡で測る。

ランチの時色々の大きさのコップを用ふる。

〔空間及時〕

或距離を告げる。(例へば學校から住所まで)

遠足の時如何程歩みしか知らず。

或仕事をする時。時計を見て一定の時間内になし終る。

時計を持つ。等。

〔計 算〕

保育材料の各種のものを數へる。

遊戯の時號令をかける。等。

〔序 數〕

第一の戸棚、第三の棚等によりて。

〔分 數〕

ランチの時リンゴ等を二分の一、四分の一に分る。コップに半分牛乳をつぐ等によりて。

〔金錢の用法〕

販賣の物品の價をつけ之を賣る事。(此圖では一年一回慈善事業の爲めバザーを開く)

貧困兒救濟の爲錢を持つてくる。等。

數を讀むこと。

數を書くこと。

## 五、公民訓練を重んずる事

彼地の學校に於ては非常に公民的訓練を重んじて居る。社會の秩序整然たる、公衆道德の徹底せると相俟つて羨ましい迄に此訓練は行き届いて居る。此等の國は多く普通選舉を實施して居るから、全體の個人が公民的心得公民的良心がなければ敗治は忽ち腐敗するのである。特に米國の如き種々の人種の寄合である國には一層此方面の訓練を必要とする。従つて公民教育は米國が最も優れて居るやうである。幼稚園に於ても英獨も此方面の注意を觀過して居るのではないが、米國に比して薄いやうに思はれる。大體前述の實際例によつて公民訓練の一斑は何ばれる思ふが、茲には一例として紐育ホレスマン幼稚園の方針中此問題に觸れて條項を擧げて、如何に公民訓練を重んじて居るかを示さう。

1、社會組織は精神に於てデモクラチックであらねばならぬから。

イ、權力、指導、參與、協力を理解せしめ。

ロ、兒童が全組織及團體に對する責任感を段々に了解せしむべき機會を作らねばならぬ。

2、此年齢の兒童に向つての道德的訓練の大部分は社會に適合すると云ふ事である。教師はこの訓練に對し又従順、尊敬の如き習慣、態度を養成する必要を自覺せねばならぬ。

3、兒童は指導者として又後輩として團體中で如何に調和的に働くべきかを習はねばならぬ。又時には團體の爲に自己の興味を壓へねばならぬ。

此等の精神は共同作業、ランチの時によく實際に現はれて居るのを見た。

## 六、むすび

前述の四項中第一の兒童數の問題は經濟上の關係もありて、吾人の思ふ様には行かぬが、理想としては一保姆の擔任數は二十名以下にある事を望む。

個別的取扱特に幼兒を自發的に働かす事、型に倣つた恩物使用以外に實生活から生命ある材料を採り來る事、團體生活に適應せしむべき公民的訓練は我國の幼稚園に於て考慮すべき養地ありと思ふ。

最後に最も切望する幼稚園と小學校との連絡である。我國の幼稚園と小學校程懸隔の甚しいものはない。幼稚園では極めて自由に、よく個性を観察して、行き届いた保育をして居るのに、彼等が一年に入るや否や、自由を束縛し、嚴格な訓練の下に一齊的に教授せんとする。兒童にとつて見れば僅か數日の差で、此の驚くべき變化に會ひ如何に感ずるであらう。この罪は寧ろ小學校側に多い様であるが、幼稚園に於ても一層小學校の基礎としての考を持ち、段々と訓練に於て小學校に近づけると共に保育材料中に無理をせない範圍で文字、數を稍々系統的に取扱ふやうにしたいものである。勿論小學校の下學年の取扱を幼稚園に近づける事も必要である。兩方より歩み寄りて此連絡を自然にする事は目下の急務と信ずる。

以上雜駁な事を述べたが幾分でも讀者諸氏の参考となれば幸である。



雑	九	八	一七	六	四	一〇	一五	一一	二七
合計	四九	五四	一〇三	四一	四一	八二	九〇	九五	一八五

以上の結果を見ると

第一に當幼稚園入園志望者百八十五人につき検定せしものであるがその中會社員最も多く次に商業を営むものが多い。驚くべきことは、醫師が三二人で第三位なることである。官吏並に大學教授専門學校教授等の二十二人も多い方である。これによつて幼稚園入園を希望する家庭の種類が如何なるものなるかを大體窺知し得るのである。

第二に検定に合格せるもの即ち入園を許可せるものとせざるものとの關係が窺知出来る。滿四歳位の幼児を一回にて檢定するのであるから檢定がその幼児の優劣を十分に判定し得るとは斷言出来ない。しかし少くとも檢定當時に於ける幼児の精神並に身體の發育良好なるものが合格者と決定せることは明白であるからして家庭の種類と幼児の優劣との關係は略推定するに難くない。檢定の際には毫末も家庭の職業について考量せざるものがこの統計に現はれたる如き事實を見ることは必ずしも偶然の結果なりと判定することが出来ない。商業を營む家庭の幼児では合格者が僅かに三十九%であるが會社員の家庭の幼児では合格者が五四・三四%、醫師の家庭の幼児では合格者が五七・八一、官吏・教授の家庭の幼児では合格者が七七・二七%の高率を示してゐる。是等の事實に對する解釋はこの統計の僅少なる數についての結果なるを以て適切を缺くの眞がありまた種々複雑なる條件が原因してゐることを想定し得るが故に特に省略して讀者の判斷に一任することにする。

## 二、兄弟姉妹數

この統計も亦少數についてのものであるから發表する程の結論を求めることが出来ない。けれども折角調査したことで

あるからその散逸することを慮れ且つ同好の方の助力を愾するために敢へて發表することを豫め斷つて置く。

○兄弟の數

不合格者	合格者	計	不合格者	合格者	計	不合格者	合格者	計

兄弟の無きもの	一七	一三	三〇	一四	九	二三	三一	二二	五三
一人あるもの	一一	一一	二二	一一	六	一七	二二	一七	三九
二人あるもの	七	八	一五	六	一一	一七	一三	一九	三二
三人あるもの	二	七	九	三	三	六	五	一〇	一五
四人あるもの	二	六	八	三	二	五	五	八	一三
五人あるもの	三	一	三	一	五	六	四	五	九
六人あるもの	四	一	五	一	二	三	五	三	八
七人あるもの	一	二	二	一	一	一	一	二	二
八人あるもの	一	二	二	一	一	一	一	二	二
○弟妹の數									
弟妹なきもの	二三	一六	三八	二〇	一四	三四	四二	三〇	七二
一人あるもの	一六	二八	四四	一四	一八	三二	三〇	四六	七六
二人あるもの	五	五	一〇	三	六	九	八	一一	一九
三人あるもの	一	一	一	一	一	一	一	一	一

幼児の家庭



右の表に於て説明すべき第一の事項は兄弟も弟妹もなき所謂獨り子と、兄弟なきも弟妹のある長子と弟妹はないが兄弟のある末子とは明白に數字に現はれてゐないことである。これは特に統計せねばならぬ事項であり面白い關係があると思はれるが茲では明白にすることの出来ないことを遺憾とする。檢定の際戸籍謄本を全部調べることの出来なかつた關係上止むを得ないのである。更に方法を講じてこの方面に關する調査をなすことを目的としてゐることを附言する。第二に兄弟のなきもの及び弟妹のなき幼児が著しく多いことは注目に値する。而して第三に兄弟の數と合格者數との關係を見ると次の如くなることである。

兄弟のなきもの	四一・五一%
兄弟一人のもの	四三・五九%
兄弟二人のもの	五九・三八%
兄弟三人のもの	六六・六五%
兄弟四人のもの	六一・五四%
兄弟五人のもの	五五・五六%
兄弟六人のもの	三七・五〇%
兄弟七人のもの	一〇〇・〇〇%
兄弟八人のもの	一〇〇・〇〇%

この歩合に於て兄弟七人もの及び兄弟八人ものものは僅々實數各々二人についてのことであるから殆ど考量するに足らぬ。只兄弟が多くとも末子であるとも父母の愛の行届き、幼児の身心發育に決して不良でないことを例示するに止まる。而して兄弟三人あるもの及び兄弟四人なるものが何れも高率を示すに反して兄弟のなきも、兄弟の一人なるものが比較的

合格歩合の悪しき點は相當注意せねばならぬ點である。幼少の時程兄弟の有無が彼等の發育に關係することの大なることを語り兄弟なき兒は比較的父母の手が行届くにもかゝらず身心の發育の宜しきもの少なきことを示すことは家庭の親たるものが反省すべきことを暗示するものといはねばならぬ。

更に弟妹の數と合格者との關係を歩合にて示すと左の如くなる。

弟妹なきもの	四一・六七%
弟妹一人あるもの	六〇・五三%
弟妹二人あるもの	五七・九〇%
弟妹三人あるもの	一〇〇・〇〇%

満四歳の幼児で弟妹の三人あることは異數であるから問題とすることは出来ない。しかし弟妹なきものよりも弟妹一人あるものでも弟妹二人あるものでも合格歩合の大なることは重要な事實を語るものでなくてはならぬ。弟妹なきものは父母の愛が一身に集つてゐる關係から却つて身心の發育が正常を缺くことが多いことを豫想し得ることを悲しむのである。我儘であるとか泣き蟲であるとかいろいろの關係から合格者の少なき事實を生ずるものとせば長子の悲哀と共に末子の不幸を考へねばならぬ。しかし父母の手が行届くの故を以て或は親の愛が濃密なる理によつてかゝる現象を呈するものとせば家庭の母たるもの餘程覺醒せねばならぬことを示すものではないか。

### 三、哺乳の種類

幼児の營養として母乳牛乳母乳の乳等に關する調査をなしたところは左の如くである。

種類	男			女			合計		
	不合格者	合格者	計	不合格者	合格者	計	不合格者	合格者	計
母乳	三四	三八	七二	二七	三一	五八	六一	六九	一三〇
牛乳	三	二	五	五	二	七	八	四	一一
母乳牛乳併用	六	一一	一八	八	六	一四	一四	一八	三二
乳母の乳	二	一	三	一	一	二	三	二	五
牛乳併用	一	二	三	一	一	二	一	三	四
乳母の乳併用									

以上の統計表を見ると牛乳だけで保育せるものまたは乳母の乳で保育せるもの、更に牛乳と乳母の乳を併用して保育せるものは甚だ少數なることが分る。母乳保育を厭ふ風が漸次に増加せんとする時代に於て是等のものゝ少數なることは喜ばしきことである。而して是等の哺乳法によれる幼児の發育を合格不合格より判定することは數が甚だ貧弱であるから殆ど問題とはならぬが茲に合格歩合を示すと左の如くなる。

- 母乳のみにより保育せるもの 五三・〇三%
  - 牛乳のみにより保育せるもの 三三・三三%
  - 母乳と牛乳とを併用せるもの 五六・二五%
  - 乳母の乳により保育せるもの 四〇・〇〇%
  - 牛乳と乳母の乳とを併用せるもの 七五・〇〇%
- これによつて見ると牛乳と乳母の乳とを併用せるものが合格歩合最も大なるも實數僅かに四人につきての問題であるから全く信用するに足らぬ。牛乳のみの保育者と乳母の乳のみによる保育者の歩合小なるは多少考量するに足ると思はれる。

尙ほ母乳のみの保育者と母乳と牛乳とを併用せるものゝ歩合比較は尙ほ多數者につき研究する必要があるけれども兎に角或種の眞理を含むものと認むることが出来ると思はれる。

#### 四、出生月

幼児の出生せる月が 何であるか試みに調査せる所を併せて茲に發表して置く。これは著しく數の小さきものについての統計であるから何等の結論をも見出すことが出来ないものである。しかし調査の散逸を防ぐ一助として發表するものである。

月次	男		女		合	
	不合格者	合格者	不合格者	合格者	不合格者	合格者
一月	三	五	一	八	一	一三
二月	八	六	四	二	二	八
三月	五	七	八	三	一	一〇
四月	二	二	一	九	三	一一
五月	三	五	一	三	三	一
六月	四	八	一	一	三	八
七月	一	二	三	五	四	七
八月	七	五	一	二	八	七
九月	七	五	五	一	二	五
計	八	一四	一九	一四	一三	二七

右の表に於て一月生のもの多くして十二月生のもの少きことは十二月末に生れたものを一月生と届けたるものあるかも知れずといふ疑問を起させるものである。また一月二月三月の三ヶ月間に生れたもの七十人なるに四五六の三ヶ月間に生れたものは僅かに三十七人、七八九の三ヶ月間に生れたもの四十三人、十、十一、十二の三ヶ月間に生れたもの三十八人である。偶然とはいへ一二三月間に出生せるもの著しく多きを知ることが出来る。之を合格不合格者につき比較すると左の如き結果を生ずる。

種	類	不合格者	合格者	計	合格者の歩合
一、二、三の三ヶ月間に出生せるもの		三九	三一	七〇	四四・二九
四、五、六の三ヶ月間に出生せるもの		一〇	二七	三七	七二・九七
七、八、九の三ヶ月間に出生せるもの		二四	一九	四三	四四・一九
一〇、一一、一二の三ヶ月間に出生せるもの		二〇	一八	三八	四七・三七

右の表を見ると四、五、六の三ヶ月間に生れたる幼児の合格歩合が他と比較にならぬ位に優秀なることを見る四月、五月、六月生れの幼児は一月、二月、三月に生れたるものよりも約一ケ年も年長者と見ることが出来るからその身心發育の良好なることは至極當然といはねばならぬ。これが小學校時代までも影響することは教育者が大に考量せねばならぬ事實で幼児や児童の出生月によりて大に發育狀況の異なることを念頭に置いて學級編制も考へねばならず一學級のものを取扱ふ上にも注意せねばならぬ。

# 蓄音機

共情遊戯「蓄音機」

ハ調  $\frac{2}{4}$

(1)

<u>1. 2</u> 3	<u>5. 4</u> <u>3. 1</u>	<u>1̇ 7</u> <u>6 1̇</u>	5.	0
ハコノ	ナヤカラ	コエガデ	ル	—
6 <u>6 5</u>	<u>1. 6</u> 5 3	2. 1 2 3	2	0
ラツパノ	オクカラ	コエガデ	ル	—
<u>3. 2</u> <u>1 2</u>	<u>3. 2</u> <u>1 2</u>	<u>3. 5</u> <u>6 5</u>	<u>1̇ 1̇</u> 6 0	
アレアレ	ズキブン	オホキナ	コエヨ	
5 <u>3 1</u>	<u>1̇ 1̇</u> 6	<u>5 5</u> <u>3. 2</u>	1.	0
ダレガ	ウタツテ	キルノデ	セウ	—

◎歌  
曲

遊情  
戯表  
「蓄音機」

(2)

こんどは 楽隊 勇ましい

ビイ〜 ドン〜 勇ましい

太鼓や 笛を たたいて 吹いて

どこで ならして ゐるのでせう。

振作作  
付歌曲  
土葛梁  
川原田  
五  
郎幽貞

◎ 振 付

(一)はこの……兩腕を曲げて兩手を少しあげ。

なかから……兩手を向き合せ(胸の幅に離して)前方へ出す。

こゑが……左手を後ろに右食指にて前に在る蓄音機を指す、上體を少し前へ傾けて。

出る……其まゝ靜止。

ラツパの……兩手を胸前にまとめ頭上へ伸ばしこれを左右に開きて下ろす。

をくから……左足一步後へ兩腕をまげて胸側後方に引く、右膝を曲げ左膝を伸ばす。

こゑがでる……膝をまげ左膝を伸ばし上體を前へ出すと同時に兩手を前方へ(少しく左右に開きて)つき出す。

あれあれ……左足一步前に上體を前に傾げ左肩を下げ

左手を左耳後に聞く如くす。

ずわぶん……右足一步前に右手を右耳後に聞く如く

す。

おほきな聲よ……兩足を揃へ一度兩手を下げ更に腕を曲げて兩前膊を立て掌を前方に向け上體をたらせ驚きたる如くす。

たれが……左足を引き兩手を左方に流し、前の蓄音機を見つめる。

うたつて……右足を引き兩手を右方に流す。

ゐるのでせう……左足を引き兩腕を曲げ兩前膊を立て耳を後ろに手をおき、上體を少しく前に傾げ左肩を下げて右下を見る。

(二)こんどは……兩手にて左側下方にて拍手一回す。

がくたい……右側下方にて拍手一回す。

いさましい……前方へ三步兩手を振りつゝ前進す。

ビイビイ……兩手を左方へ左足にて跳ぶ。

ドン／＼……兩手を右方へ左足にて跳ぶ。

いさましい……兩食指にて太鼓を打つ如くして足踏をなす。

たいこや……胸前に兩手を出し掌を向き合せ太鼓を作

る。

ふえを……兩食指を胸前にまとめ更に少しく左右に開く。

たたいて……足踏しつゝ兩食指にて太鼓を打つ如くす。

ふいて……兩手を口の右方へ左手の甲の前にし口に近

く右方へ、右手は甲を上指先きを前にして左手の右方に、笛を吹く如くして足踏す。

どこで……左足一步後へ兩手を左下方に流し。

ならして……右一步後へ兩手を右下方に流し。

ゐるのでせう……第一の終りと同じくす。

## 幼児に聞かせる囃

水 谷 年 惠

### 牝雞と猫

牝雞が卵を抱いて、じつとおうちの中に坐つてゐました。猫が戸のすき間からのぞいて、

「牝雞さん、一寸表へ遊びに出ませんか、空がよく晴れて、雲雀が面白い歌を歌つてゐますよ、あなたの好きな青蟲

が、菜のはつばにたかつてゐますよ。一寸出てごらん。」と言ひました。牝雞は、

「いゝえ、私は赤ちやん達が卵からかへるまでは表へなぞ出ません。」

と言つて、あとは知らん顔をしてゐました。

何日かたつと、牝雞の抱いてゐた卵の中から、可愛らし



いひよつこが五羽も六羽も出て、ビヨ、ビヨ、ビヨと鳴いて、お母さんの牝雞のまはりで遊びました。

猫はまた戸のすき間からのぞいて、

「牝雞さん、赤ちやん達が可哀相だから、一寸表へ出しておやりなさい。表には赤ちやん達の好きなものがいっぱいありますよ。そして表は廣いんですよ。一寸出しておやりなさいな。」

と言つてすゝめました。牝雞は、

「表へ出さなくても、おうちの中へお茶でもお米でも何でも入れて貰つてゐますから困りはしませんよ。それに、おうちの中だつてこんなに廣いのですから、赤ちやん達はいくらでもはね廻れます。」

猫はいよつこを一羽でもいゝからとつて食べたいと思つて、眼を光らせて見てをりました。

「猫のをぢさん、此處までお出で、ビヨ、ビヨ、ビヨ。」とひよつこ達は、皆で躍つて囃し立てゝ居ります。腹が立つて、腹が立つてたまりませんが、猫はどうすることも出来ません。すこ〜と歸つていきました。

「いまい、しい。一つ卵を見つけて来よう。そして自分かへしてひよつこを食べることにしよう。」

と言つて、猫は卵を探しに出かけました。方々探して廻るうちに、お池の水際の所で、一つの卵を見付けました。それは蛇が産んでおいた卵でしたが、猫は雞の卵だと思ひ込んでしまひました。そして

「これはうまい、しめたぞ。」

と言つて、其の卵を自分のうちへ持つて来て、毎日抱いておました。

「今に可愛らしいひよつこが出たら食べてやらう。柔かくてどんなにうまいだらう。」

と舌なめづりして喜んでおました。

何日かたつと、抱いてゐた卵が動き出しました。

「ほら、お馳走さま。」

かう言つて、猫は卵の殻を破つて出て来るひよつこを待つておました。ところがどうでせう。卵の殻を破つて出て来たのは、可愛らしいひよつこではなくて、一匹の蛇が這ひ出して来ました。

「やつ、これは大變、助けて——助けて——」  
猫は一生懸命で逃げ出しました。

### お爺さんと鼠

昔ある所にお爺さんがありました。そのお爺さんが田圃から歸つて來ると、道ばたの草の中で、チュウ／＼と苦しさを聲を出して鳴いてゐるものがありました。

「誰だえ、チュウ／＼と鳴いてゐるのは。」

かう言つてお爺さんは腰をかどめて、草の中へ手を入れて見ました。

「チュウ／＼。」

と又悲しさを聲をたてゝ鳴きました。お爺さんは草の中から、一匹の鼠をつまみ上げて、

「おや／＼、お前は足に怪我をしたね。」

と言ひました。鼠の前足には、何かで切つたやうな傷がありました。

「可哀相に、よし／＼、今藥を付けてやるよ。」

お爺さんは小さな貝殻にはいつた藥を、自分の指の先に附

けて、鼠の傷口へなすり込んでやりました。

「これでよい、／＼。今すぐによくなるよ。さあお歸り。」

とお爺さんはその鼠を草の中へ入れてやりました。

「チュウ／＼、有難う／＼。」

鼠は嬉しうに鳴いて、どこかへ行つてしまひました。

晩になつて、お爺さんが、

「どれ／＼、もう寝ようかな。」

と言つてゐる所へ、可愛らしい聲で、

「ごめん下さい。」

とはいつて來た人がありました。誰かと思つてお爺さんが出て見ると、それは／＼美しい女の人が、髪を島田に結つて、きれいな着物を着て立つてゐました。

「まあ、あなたさまは何處のお方でいらつしやいますか、

何の御用でこんな所へお出になりました。」

お爺さんはびつくりしてかう聞きました。すると女の人は、

「私は今日あなたに助けていたとききました鼠でございます。お爺さん藥を付けて下さいまして有難うございました。おかげ様で傷がすっかり直りました。御禮に御馳走

を致しますから、私のうちまで一寸お出で下さい。」  
と言ひました。

「おや、さうでしたか、それでは遠慮なしにあげりませう。」

お爺さんは女に化けてゐる鼠のあとあら、喜んでついで行きました。暫く行くと、大きな門の前へ出ました。

「ほう、立派な門があるね、こんな所にこんな立派な門が何時の間に出來たのかな。」

お爺さんがひとり言を言つてびつくりしてゐると、

「お爺さん、此處が私のうちです。どうぞおはいり下さい」と女の人になつた鼠が言ひました。

二人の足音を聞つけた鼠たち、美しい女に化けたり、立派な男になつたりして、お爺さんをお迎へに出て來ました。

お庭のむかうに大きなお殿があつて、お殿の中の廣いお座敷にお馳走が一ばいにならべてあります。お爺さんは座敷にあがつて、そのお馳走を食べはじめました。どの御馳走も、どの御馳走もおいしいものばかりで、お爺さんのほ

つべだがとれさうでした。

「あ、うまい。お、うまい。うまい、うまい。」

と言つて、お爺さんは澤山に澤山に食べました。

「お爺さん、これはお土産でございます。」

薬を付けて貰つた鼠が、大きなお盆の上、金銀珊瑚などの寶物を山盛りにして、お爺さんの前へ出しました。

「これは、みごとな寶物、遠慮なしに貰つて行きませう。」

とお爺さんはその寶物を風呂敷に包んでしよいました。

「お爺さん、私がお送り致します。一寸支度をして参りますから。」

と言つてその鼠は奥へはいて行きました。お爺さんはそのひまに一寸隣りの座敷をのぞいて見ました。すると、隣りの座敷には、今貰つたよりも、もつとくびかくした寶物が一ばい積んでありました。

「ひやあ——、仰山な寶物だなあ——。」

お爺さんびつくりしてしまひました。そして其の寶物も少し欲しくなつて、

「ニヤアム、ニヤアム。」

と猫の鳴きまねをしました。すると大勢の鼠達は、ドタン、パタンと大騒ぎをはじめ、一匹残らず皆逃出していつてしまひました。お爺さんは、

「これはうまい」

と大喜びで、その座敷のピカ／＼した寶物を、兩方の袂へも、懐の中へも一ぱいに入れました。

「さあもう之でよい。」

と言つて、鼠の御殿を出しましたが、門がびつ／＼しやりしまつてゐて出られません。

「これは困つた。」

と言つて、お庭の中をぐる／＼廻つてゐる中に、小さな穴を見付けました。

「よし、此の穴から出てやらう。」

と、小さな穴の中へはいつて行きましたが、何處まで行つても地面の上へは出られません。地面の中をモク／＼、モク／＼歩いて行く中に豆腐屋さんのおうちの下までやつて來ました。

豆腐屋さんは、

「おや／＼、地面の下で何だかモク／＼やつてるよ、をかしいなあ。」

と言つて、熱い／＼お湯をモク／＼動いてゐる地面へザーツと流しました。すると、熱いお湯で柔かになつた地面が、むつくりとむくれあがつて、中から一人のお爺さんが出て來ました。

「あーあ、熱かつた、熱かつた。」

と言つて、お爺さんは頭をつるりとなでました。

お爺さんの頭は熱いお湯を浴びて、つる／＼に秀げてしまつて、毛が一本もなくなつてゐました。お爺さんはあまり慾が深かつたので頭が禿げたのでせう。

## 保 育 叢 談

日日の新聞や毎月発行せられる雑誌上に發表せられて論説は諸方面に亘つてゐるが是等の中育兒並に保育に關する事項を選定して轉載し或は批評することにする。

### 第一、血清學による親子の眞偽判定

#### (一)

これは東京日日新聞が醫學博士桐原眞一氏談として掲載せるもので保育に従事するものは特に熟讀する必要がある。

昔から親子兄弟の間には同じ血が通つてゐるといふことは一般に唱へられてゐることで、旅先などで死んだ人のそばに、遙々親身のもが出かけて行つて、死骸に手が觸れると、死人から鼻血が出るなどといふやうな俗説がある位である。朝鮮にもこれに似通つた俗説がある。それは鉢の中に清水をもつてその中に親子の血液を一滴づゝ滴して見て、若しそれが眞の親子であればこの兩方の血が萬遍なくまざるが、さうでない場合にはその血は決してまざらなといふのである。素人考へにも、いはゆる血の通つてゐる親子兄弟の間には何か特別な血液關係でもありさうに思はれる。が、實際科學的な新しい方法でこれ等の關係を明らかにすることが出來ぬものだらうか。最近に於ける血清學の進歩はある程度までこの間の消息を明かにすることが出來るやうになつた。血液中の或性質の遺傳の研究からしてはからずも親子兄弟の眞偽を或程

度まで判定することが可能になつたのである。

## (11)

血液性分の遺傳について述べる前に順序として人類血液の分類のことを説明する。種屬の異なつた動物間の血液の區別は、以前から知られてゐる免疫反應或は血液反應と稱へらるゝ種屬特異の反應によつて明かに區別出来るのである。例へば馬と牛の血液の區別、人間と犬の血液の區別等は、この反應ですぐに分明する譯である。然しこの反應では種屬の異なつたものゝ間の血液の區別はつくが、同種屬間個々の血液の相違は全く區別出来ない。所が、人類の血液は特別に凝集反應といふ矢張り一種の血清反應によつて四種屬に分けることが出来るのである。人類の血液は特別に凝集反應といふ一種の血清反應によつて四種屬に分けることが出来るが、それにはまづ、二三十名の人間の血液を少量づつ取つて、これを或方法で血清と血球に分ける。そのをくゝの血球と血清とを他人同志組み合せて混合して見る(例へば甲の血清の中に乙の血球を混じ、乙の血清の中に甲の血球を混する)と或組み合せでは血清の中で血球がいくつかの塊に固かつてしまふ。かういふのを凝集反應が超こつたといふ。また或組み合せでは何等塊のやうなものを造らず、一樣に血球が浮遊してゐる。これを凝集反應が起こらぬといふ。斯く凝集反應の起こるのと起こらぬのとで人間の血液が四種に分けられるのである。その四種はO屬、A屬、B屬、AB屬と名づけられてゐる。O屬の血球は何人の血清に混するも凝集を起さず。A屬の血球はO屬またはB屬の血清と混ぜらるゝ時凝集起こり、A屬の血清と混するも凝集起こらず。B屬の血球はO屬及びA屬の血清と混ぜらるゝ時凝集起こり、A屬、B屬の血清と混するも凝集起こらず。AB屬の血球はA屬以外の屬のすべての血清にあひ凝集を起す。右の事實は一見甚だ複雑なやうに思へるが、實際は極めて簡單明瞭で、少しく注意して各屬の條下を比較して見れば、何人にも直にその相違の點と、四種屬に區別されたゆゑんが判明する。以上四種類に人血が分類せられるといふことは、勿論或一名の人の血液が四つに分けられるのではなくして、多人數の血液を檢查して見

ると、その内の或人はA屬に屬し、また他の人はB屬に屬するといふやうな工合に分けて四群にすることが出来るといふのである。

(三)

人間の血液が四種に分類されるといふ事實は既に二十年前から分かつてゐたのであるが、初めは餘り一般の注意をひかなかつた。近年になつて人間同志の間の輸血療法が盛んになり血液を貰ふ人(注入される人)と與ふる人との間の、屬別の如何が問題になるやうになつたので、従つてこの方面の研究が盛んになり、親子兄弟間の眞偽の判明、或ひは人種學や民族研究にまでこの方法を應用するやうになつたのである。ドイツのハイデルベルグ大學の教授デュンゲン氏は同大學の教授連の七十二家族で兩親と子女の血液の屬を調べて、前述の如く四屬に分類せられた各屬は規則正しき遺傳の方則に従つて親子間に遺傳せられるといふことを發見し、これにより親子の眞偽を區別することが出来るだらうといふ説を唱へた。その後オツテンベルグ氏が前のデュンゲン氏のやつた仕事とそれに自分のやつた少數の例を元として一つの表を作つた。その表は親子の間の血液屬別の關係を現したもので、それを見ると、四屬の血液の種類が兩親と子女の間にどういふ工合につたはつて行くか一目瞭然である。

オツテンベルグの表

兩 親                      子   女

AとAの結合の場合      A或はO  
AとOの結合の場合

Oとの結合の場合      Oのみ

BBとBの結合の場合      B或はO  
BBとOの結合の場合

A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
と	A	と	B	と	A	と	B	と	A
と	A	と	B	と	A	と	B	と	A

の結合の場合には凡ての屬を生ず

(四)

前にかゝげた表によると、AとAよりBとOまでの結合から生ずる子女の血液の屬は、或決つた制限された屬しか出現しない。即ちAとAの結合の場合の子供は、常にA屬かO屬にかぎられるので、若しB屬かA B屬が出た場合には、それは偽りの子供であるといひ得る。また兩親の何づれもO屬の場合、即ちOとOの結合の子供は皆O屬ばかりしか出てこない。若しAとB、A Bといふ子供がゐたら、その子供は其兩親の眞の子供ではないわけだ。それゆゑ兩親の血液の屬がわかると、その子供の屬は大抵想像がつく。また子供の屬と、兩親の一方、例へば母の屬のわかつてゐる場合には、その父の屬は推定することが可能である。この關係を應用して私生兒の眞偽兄弟の眞偽等を制定しようといふのである。但この方法には誰にも氣付かれる缺點がある。その一つはAとB、A BとXといふやうな結合即ち兩親の間にAとBが存在する時には、その子供にすべての屬が出来ることである。斯かる結合から出来る子供の眞偽は、この方法では全く區別が出來ない。然しこのAとB、乃至A BとA Bの結合數に比して、割合に少く、大體三十プロセント前後である。換言すればすべての結合、中約三割の結合の子供はこの方法では判定が出來ない譯となる。等二には、この方法によると、否定的には確であるが、肯定的には絶對でない。といふのは、例へばOとOとの組合せの兩親に若しA、B、A Bといふやうな、



出来ない筈の子供がゐたならば、絶対にこれ等の子供はその両親の實子でないことがいはれるが、若しこの組合せの子供にO屬のがゐる場合、果してこの子はその両親の實子であるや否やは、嚴密にいへば斷言出来ないからである。

## (五)

以上述べ來つたオツテンベルグ等の説には賛成をしてゐる方の學者が多いが、二三反對をしてゐる人もある。従つて法醫學上、私生兒或ひは兄弟の眞偽鑑別に、この方法を適用することは、目下なほ歐米でも問題になつてゐる。反對連は、自分等が見た例にはオツテンベルグの表に適合せぬものがあつたといふのである。即ちOとOとの結合からAが出來たり、AとOの結合からBが出來たりした例があるといふのである。吾々はこのオツテンベルグの表の眞偽と、今一つは四種の屬別が果して遺傳の法則通りに親から子につたへられるや否やを知らんと欲し、内地人及び朝鮮人の家族百三十九家族六百餘りを検査して見た。検査した家庭は皆何れも私自身の親戚と、知己及びこの仕事を終始手傳つてくれてゐる白麟濟君の親戚で、皆われわれのよく知つてゐる家庭なのである。尙附加へて置きたいのは、朝鮮及び日本では、A屬とB屬との數が殆ど同數に近く、従つてあらゆる結合を比較的少數者間に見ることが出来るのと、子供の數が多いことで、このやうな研究をなすのには、甚だ都合がよい。われわれの検査した結果はどうなつたかといふと、一つの例外もなく、オツテンベルグの表に一致し、尙ほ計算の結果、遺傳の法則に従つて遺傳してゐることが證明された。オツテンベルグの表が正常であるとする、この方法は子供の眞偽の判定等に應用することが出来るわけである。前に述べたやうな不満足な點はあるが、現今の科學では、このくらゐのところまでか出来ないものである。

## 第二、これから多いチフテリー

これも東京日日新聞が醫學博士清水茂松氏談として掲載せる所のものである。幼稚園の如くチフテリーに罹り易き年齢

の幼児を集めてゐる所では十分注意せねばならぬ。特に轉載する。

(一)

早春三月から初夏の五月にかけて空つ風の吹きまくるころは、満二歳から七歳位までの小児のデフテリ患者が殖えるから子供を持つ親達は注意せねばならぬ、デフテリー菌の毒素によつて滲質物が咽頭や喉頭に出來て一種の偽膜をつくるので、なぜ危険かといへば毒素が體內に入れば心臓や循環系統を犯して痲痺を起し生命に危険のある恐るべき傳染病の一つである。

(二)

犯す局所によつてちがうが、一番よく犯されるのは咽頭で發熱も割合に低く家庭でも不注意の内に知らず識らず病勢をつのらせて醫者に診察を受けるまでには多くは發病後よほどの日數を経てゐる、若し小児が喉が痛いと訴へて發熱した場合は茶さじの柄のところでも舌を押へて口腔内の喉元を見て、扁桃腺のところは白色のものがついてゐたら早く醫者に見せることで、普通の扁桃腺炎のこともあるが、若しデフテリとすれば血清注射を受けねばならぬ日數がたつと注射でも駄目である。

喉頭デフテリーは喉笛に出來るデフテリーで昔から俗に馬痺風といつて犬のほえるやうなせきをする、吸入や喉の濕布を行つてもだん／＼病勢が進行して、呼吸が苦くなる、鋸で木をひくやうなギー／＼した呼吸となり、聲が涸れて甚だしゝのは聲が出なくなる、呼吸困難、脈搏うすくなり窒息して倒れる場合がある、血清注射で效がなければ刀の手術療法を受けねばならぬ。

鼻デフテリーは鼻風ぐらゐにうつちやつて置くが長く放擲しておく鼻がつまつて膿が出て血液を混するやうになるとデフテリー菌毒素のために生命が危険になるその他眼瞼結膜等にもデフテリーが出來るがこれは稀なことだ。

## (三)

何れにしてもデフテリーは血清注射によらねばならぬがこの血清といふのはまづたく人間に無害とはいへぬ。時々血清過敏性といつて一回の注射だけでも危険な目に合うことがある。小兒がかつてデフテリーにかゝつて、或ひは疑ひで血清注射を受けてから六ヶ月後ぐらゐまでに再びデフテリーで第二回の血清注射を受けるのはよほど注意を要することで、注射したゝめ全身に蕁麻疹を起し發熱したりかゆがつたり關節のいたみが、注射して一週間後に起こつて來た場合は血清反應だから危険はないが、注射後に唇が紫色に變り顔が蒼白となり脈膊微弱になると急に倒れる、これは危険症狀である。デフテリーは現今の醫學進歩の程度では血清注射よりほかに道がないから危険でも致し方がない。デフテリーにかゝつた時は絶対に安靜が必要で、血清注射の效力があつたと見ても、親がだきあげたり運動すると突然心臓麻痺を起こす。全快したと思つてからなほ三週間ぐらゐは安靜を要する。入院患者が退院をせまつて急にだきあげたゝめ病院の女關で心臓麻痺を起こした等の例は澤山あるから最も注意を要することだ。

デフテリーの豫防は含嗽奨励よりほかに豫防法がない。ホーサン水(五十倍)かカサンカ水素水(普通賣藥店で賣つてゐるものを三倍位にうすめたもの)で一日に三回ぐらゐ含嗽させるので、二歳前後の小兒は自分で含嗽が出來にくいから親がガーゼで口腔内を時時ふいてやらねばならぬ。

# 幼なぐさ (一)

臥雲

○  
あこちゃん(五歳)(一昨年の震災に母を亡つた)

おかあさんが五疊(母の部屋)でお仕事しながら「あこー」と仰つたことを思ひ出すと。といふからお思ひ出しになると淋しいといふのですか。ときくと。いゝえ獨りでに笑へて來るといふ。ママお可哀想に、大人なら思ひ出すと淋しいといふのに。あこちゃんは。其時嬉しかつたに。といふ事を思ひ出すとは。ほんとに小さい方は何といぢらしいのでせうと。側で涙をこぼすと。あこちゃんは。寄つてきて變な方ね。何ぜ泣くのといふ。だつて餘りお可愛らしいからよと。言ふと。あこちゃんらは悲しい時涙がでてよ。可愛らしいといふ時には、なかないのよ。

あこちゃん、そんなに澤山おかしをめし上ると。おながかわるくなりますよ。御病氣になつて死んだらどうしますかと。いふと。死ぬといひのよ。といふ。何ぜときくと。死ねばおかあさんの處へゆかれるから。

夏休に。あこちゃん。をつれて北陸に旅行した時。名古屋で一泊した。朝起きるとすぐ兩手をついて。結構な宿やでとめていたどきましてありがとうございます。(やどやで泊つたことが始めてであつた)

あこちゃんの兄さんはいたづらざかりで。いくら言うても言うても同じことをくりかへしてはする。だからある日。そんなにいたづらばかりしては。いけないじやありませんか。幾度も幾度も。いつてもやめないと。よくよくわけのわからぬ男だねといふと。あこちゃんが側にきいてゐて

「坊ちゃん。」あこちゃんとおつむりをかへてあげませうか。

○

あこちゃん(六歳)に

おつむりをうつと、おばかさんになりますよ。といふと間もなく押入のふすまにあたまをおつつけて、すぐ。ア、五と三と加へたら八になつた。ばかにならないでよかつた。

兄十歳

妹六歳(あこちゃん)

兄 朝目をさまして。僕は昨夜おかあさまの夢を見てよ。

姉 ソー何も仰らなかつたでせう。お逝くなりになつた

かたは。夢にでも何も言はないといひますから。

妹 だつて夢はさかゆめといふじやありませんか。

あこちゃん。或日「我等は日本男兒なり世界でえらいはわれらなりとうたつた。世界でつよいはといふのでせう。」

あこちゃんはなかなかほさない世界でえらいはと言ふては人の顔をニヤリと笑ひながらみる。あこちゃんは強情ね。大人はあんまりべこべこ人のいふことをきくのはみつともない。しつかりした強情な處があるといふが。子供はすなほな方がよいね。といふと。あこちゃんどうせ大人になつて強情になるのがよいなら。子供の時からなつておけばいゝじやありませんか。

○

妹七歳尋常一年

姉八歳尋常二年

妹 おねいさん——おねいさんの級に。意地わるの人あゝる。

姉 そんなそこと聞くものではありませんか。言ふのもい

やだし。いはれた人は。お氣の毒じやありませんか。

妹 朝洗面場で。何か女中について女中を困らせてゐる。

姉 ——子さん。召使はいたはれ。と習つたじやありませんか。

妹 朝學校に行くのに出遅つて居ると。

姉 子さん。また御心の御病氣でせう。

妹は學校で直視教授のある日は。おなかどいたいか。おつむりがいたいとかいふ。而してあとでけふは直觀べいがあるからいやだといふ。

## 東京女師幼稚園だより (二)

### 1 復舊設備

當幼稚園は震災後諸般の施設復舊に努力してゐたが、近時漸く相當の設備が出来るやうになつた。是等についての説明は適當の機会に發表して、幼稚園を新設せられる方の参考に供することに於て茲に新に制定せる保護者心得を掲載する。勿論保護者心得のことであるから、當幼稚園の保護者に對するものではあるが、多少の参考になるかとも考へるのである。この保護者心得は震災前のものを更に整

東京女高師幼稚園だより

姉妹で二月初めから。毎日毎日おひなさまかざつて頂戴く〜といふ。おつきの女中が奥様に伺つてから(丁度母は病中だつた)といふ。姉、アア、アアわたし早く奥様になりたいわ。そうすると早くからおひなさま飾つて。毎日〜お雛さまあそびするわ。

理して制定したもので、多年の経験から一應保護者の心得てよいことを簡單に發表したものである。保護者會と加入園式の際之を解説することが少くない。

### 2 保護者心得(東京女子高等師範學校附屬幼稚園)

當幼稚園ニ幼児ヲ入園セシメラレタ方は當幼稚園ノ保育方針ニ注意シ協力シテ幼児保育ノ目的ヲ達スルヤウニ努メラレタシ。

(一) 當幼稚園ハ幼児ノ保育ニ任ズルト共ニ幼児保育法ノ

研究ヲナスモノデアリマスカラ其ノ點モ豫メ御了解アラ  
ンコトヲ望ミマス。

(二)幼稚園ハ幼兒ノ生活作業スル間ニ身體精神ノ兩方面ニ  
於ケル發育ヲ促進助長スルノデアリマスカラ、保育課目  
トシテハ遊戯・唱歌・談話・手技等ガアリマス。シカシ小學  
校ノ如キ學科ノ知識ヲ特ニ授ケルコトヲ致シマセン。

(三)幼兒ガ自ラ爲シ得ルコトハ成ルベク人手ヲ借りズ自ラ  
ナスヤウニ躑ケラレタシ。

(四)毎年二回位保護者會ヲ開キ、特ニ保護者ノ來園ヲ請ウ  
テ保育ニ關スル相談ヲスルコトニイタシマス。シカシ家  
庭ニ於テ幼兒保育ノ任ニ當ラレル方ハ時々來園セラレ、  
幼稚園ニ於ケル保育ノ實況ヲ參觀セラレタ上、必要ニ應  
ジ、擔任保姆ト相談下サルコトヲ希望イタシマス。  
尙ホ保護者トシテ心得ラレタキ注意事項ヲ左ニ掲ゲマ  
ス。

## 服 装

(一)幼兒ノ服裝ハ質素輕快ナルモノトセラレタシ。從ツテ

男女兒共ニ身體ノ發育ヲ妨ゲズ運動ノ自由ナル洋服ガヨ  
ロシイ。

(二)男女兒共ニ前掛(エプロン)ヲ必 着用セシメラレタ  
ク、又女兒ニハ是非下穿(パンツ)ヲ用ヒシメラレタシ。

(三)帽子ハ男女兒共ニ一定ノ制定ガナイカラ適宜質素デ輕  
快ノモノヲ使用セシメラレタシ。女兒ノ頭髮ハ「オカツ  
パ」デ、リボン等ノ裝飾品ヲツケナイ方ガヨロシイ。

(四)履物ハ成ルベク靴トシ、輕クシテ運動ニ便利、且ツ着  
用ノ簡單ナルモノヲ用ヒセシメラレタシ。ソシテ下靴ト  
上靴トヲ區別スルヤウニセラレタシ。

## 携 帶 品

(一)ハンケチ・鼻紙ハ必ズ攜帶セシメラレタシ。シカシ家庭  
ヨリ玩具・繪本・金錢、ソノ他不用ノ品ハ一切攜帶セシメ  
ナイヤウニ注意セラレタシ。

(二)辨當ニハ必ズ茶碗・箸(又ハフオーク)・湯呑・布片を附  
屬セシメラレタシ。ソシテ是等ノ器物ハ毎日常家庭ニ於テ  
十分清潔ニ洗滌シテ下サイ。

(三) 幼児ガ幼稚園ニ於テ使用スル筆箱・鉛筆・色鉛筆・クレヨン・鉄・手工帳・自由畫帳・塗畫帳・粘土甕等ハ保育ノ必要上大體一定シテアリマスカラ成ルベクソレヲ使用セシメラレタイ。

(四) 凡テ幼児ノ携帶品ニハ一々ソノ姓名ヲ假名書デ明記シテ置カレタシ。

## 送 迎

(一) 幼稚園ノ往復ニハ確實ナル附添人ヲ附ケセラレタシ。

(二) 附添人ハ成ルベク一定シ、豫メ擔、保姆ニ届出デラレタシ。若シ臨時ニ變更サレタ場合ニハソノ旨ヲ明カニスル適當ナル方法ヲ講ゼラレタシ。尙ホ附添人ハ當幼稚園ノ命令ニ從フヤウニ注意セラレタシ。

(三) 登園降園ノ時刻ハ變更ノ都度通知イタシマスカラ、アマリ早く登園セラレヌヤウ注意セラレタシ。又歸宅ノ遅レルコトノナキヤウ附添人ヲ監督セラレタシ。

(四) 當幼稚園ニハ附添人室ガアリマセンカラ、附添人ハ幼児ヲ送り届ケニナツタラ一旦歸宅シ、改メテ迎ニ來ラレ

ル方ガ好都合デセウ。附添人ハ園内ノ告知板ニ時々注意セラレタシ。

## 諸 届

(一) 病氣ソノ他ノ事故ニヨツテ幼児ヲ休園セシメラレルトキハ、ソノ理由ヲ明記シテソノ都度、届出デラレタシ。

(二) 幼児ノ住所、保護者ノ住所ニ移動ヲ生ジタ場合ニハ必ず届出デラレルコト。電話番号モ豫メ届出デラレタシ。シカシ幼児ニハ一切電話ノ取次ハセヌコトニナツテキマス。

## 傳 染 病

(一) 幼児ガモシ左掲ノ傳染病ニカカツタトキハ、登園ヲ見合セシメルコトハ勿論、全治後登園セシメラレルニモ傳染ノ虞ナキコトヲ記シタ醫師ノ證明書ヲ當幼稚園ニ差出サレタシ。

痘瘡 實布埜利亞 猩紅熱 發疹蜜扶斯 ペスト 赤痢 虎列刺 腸窒扶斯 パラチフス 流行性腦脊髓膜



炎

(一) 幼児ノ家族又ハ同居人中ニ前項ノ傳染病ニカカリタル方ガアル場合ニ、幼児ヲ登園セシメラレルニハ醫師ヨリ適當ナ處置ヲ受ケ、且傳染ノ虞ナキコトヲ記シタ醫師ノ證明書ヲ差出サレタシ。

(二) 若し左ノ傳染病ニカカツタ幼児ヲ登園セシメラレルトキハ、ソノ病狀ニヨリ醫師ヨリ適當ナ處置ヲ受ケ、且ツ傳染ノ虞ナキコトヲ記シタ醫師ノ證明書ヲ差出サレタシ。

百日咳 麻疹 流行性感冒 流行性耳下腺炎 風疹

水痘 肺結核 喉頭結核其他結核病 癩病 疥癬其他ノ傳染性皮膚病

トラホーム其他ノ傳染性眼疾

以上諸疾病ノ擬似症モ亦之レニ準ズルコト

保育料

(一) 保育料ハ必ズ期日内ニ、定額ニ過不足ナク本校會計課ニ納付セラレタシ。幼児ニ持參セシメラレルコトハ堅クオ斷リシマス。

(二) 保育料ハ成ルベク一期若クハ一箇年分ヲ纏メテ納付スル方ガ御便利デアリマス。但シ一旦納付シタル保育料ハ還付シナイ規則ニナツテキマス。

雜件

(一) 手技材料等ノ費用ヲ徴スル場合ニハ、ソノ旨通知イタシマスカラ所定ノ金錢ヲ封入ノ上、姓名ヲ記サレテ提出セラレタシ。コノ場合ニモ幼児ニ金錢ヲ渡サルコトハサケラレタシ。

(二) 當幼稚園ヨリ幼児ニ關スル調査ヲオ頼ミシタ場合ニハ事實アリノ儘ヲ御記入ノ上、返附シテ下サイ。

(三) 保護者懇話會ニハ保護者(成ルベク母親)自身ガ出席セラレタシ。若シムヲ得ザル事情ガアツテ代理者ヲ出席セシメラレルトキハ幼児保育ニ責任ヲ有セラレル方ヲ選バレタシ。

3 保育修了式

大正十三年度保育修了式は去る三月二十五日に舉行せられた。保育修了者八十五名、内附屬小學校第一部に入學するもの二十六名他は附屬小學校第二部第三部又は東京高等師範學校附屬小學校に入學し尙ほ若干名市内小學校又は私立小學校に入學することになった。

式は十時始まり先づ敬禮あつて學校長の挨拶があつた。保育修了幼兒に對する平易な訓辭から一年保育幼兒の心得更に保護者に對する挨拶が行はれて後、左のプログラムによつて修了幼兒のお話、唱歌遊戯を行つた。

### プログラム

- 一、合唱 春が來た 全體
- 一、お話 わにさめ 山の組
- 一、唱歌 わにさめ 山の組
- 一、遊戯 兵太  
桃太  
黒丸  
坊 山の組
- 一、唱歌 赤い鳥・小鳥 海の組

東京女高師幼稚園だより

- 一、遊戯 コケツコ  
風船  
おいてきぼり 海の組
- 一、唱歌 こむ風船  
ひばり 林の組
- 一、遊戯 牛若丸  
春が來た  
飛行機 林の組
- 一、唱歌 葉ばつば 池の組
- 一、遊戯 春の船  
水だれぼ  
雨だれぼ  
つくりさん  
駄つくら 池の組

大正十四年三月二十五日

以上

更に保育實習科生徒の遊戯を終つて記念撮影を行つた。修了式と稱するも小學校に於ける卒業式とは異り形式ばつたものではない。勿論修了證書といふべきものは與へないから一寸米國などに於ける學校の卒業式に類する點も少なく、兎に角修了幼兒の父兄は學校の招待によつて殆ど全部の臨席があり親も子も保母もまた残るも去るも喜びの中に自分れをなすといふ有様であつた。

#### 4 保育実習科生徒の修了

昨年四月十一日より入學保育の理論並に實習に研究努力せる保育実習科生徒十有七名は三月二十七日修了證書を授與せられた。茲に若き元氣に満ち兒童愛に漲れる保姆諸君を保育界に送り出した譯である。特に若き保姆諸君の氏名を列擧して將來の活動を期待したいと思ふ。

石川 サイ 井浦 多美 羽生 フイ  
 北條 孝 床次 夏 小川 ツネ

國木田みどり 山村 きよ 松木 初枝  
 小俣 ひさ 後藤 茂兎 北島なほゑ  
 岸邊 静子 平田 梅子 平田 富美  
 關根 とし 岡本 千枝

是等の諸君は既に就任すべき幼稚園も確定せるもの多く或は家庭の事情上直に就任せないものもあるが兎に角幼児保育のため直接全力を擧げて努力せられる筈である。

(一四、三、三〇、醫峰生)

#### 〇みどり會々員諸姉へ

會員名簿を作らうと思ひます。

住所と奉職園名、と氏名(改名の方は舊とお記し下さい)を母校幼稚園内幹事あて、で早速お送り下さいまし。なほ、この雜誌をご覽にならぬ、お知合の會員がございましたら、そへてお知らせ下さるようお願い申上ります。

みどり會 幹事

長編『兼ちゃん』  
小説

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

第五「バテ」

吉藏が臺所の爐の前で、晚餐後の煙草をふかしてゐると、兼ちゃんが、

「あたい、大きくなつたらね、繪をかく人になるんだよ。」と言つた。

「繪をかく人？」と父親はきゝかへして「お芳、兼公の言ひ草をきいたかい。」と妻に尋ねた。

お芳は、人指ゆびと親指を濕らして縫糸の尖端を熱り、針のめどに通しておいて、さて、

「繪をかく人つて？ 兼坊ほんとの繪をかくのかい。」といつた。

兼公はとんでもないといふ調子で、

「うーん、ちがふ。あたいね、大きなパンキの桶と大きな刷子と持つてね、梯子の上へのつかつて、白ペンキだの赤ペンキだの青ペンキだの繪をかくんだよ。そして……」

「あゝ、お前、家屋を塗るのか。」と吉藏がいふと、

「あゝ、そして店の看板もかくんだよ。そしてパテの塊でもつて、孔をふさいだりするんだ。あたい、パテ好きだよ。ほら、こゝに持つてらあ。」と兼公は言つて、ツボンのかくしから灰白色のベタ／＼したものを取出した。

「あらいやだー」とお芳は顔を燈めて「どこから持つて来たの。そんないやなもの持つて、着物が汚れるぢやないか。」  
「初ちゃんの、お父ちゃんね、時々初ちゃんにくれるんだよ。初ちゃんの、お父ちゃん指物やだから。」

吉藏が、

「お前、初ちゃんと喧嘩しちまつたつていふぢやないか。また仲がよくなつたのか。」ときくと。

「そうぢやない。あたい初ちゃんがバテを持つてゐたから、すこしおくれつていつたの。」

「あの子は良い子だね。お前にくれたのかい。」とお芳は縫物から顔を上げてほめた。

「呉れたんぢやないよ母ちゃん。あたいが取つてやつたの。」

「そんな事をして、まあ。」とお芳は首を振つて非難した。

「初ちゃん、あたいより大きいよ、母ちゃん。」

「大きいけれど、足がわるいだらう。」

「あたい 打つてやつたら初ちゃん轉んぢやつたからそのバテを取つたんだよ。」と兼公は平気で話した。

吉藏は笑ひ出さうとしたが、妻の眼付を見て急に止めてしまつた。お芳は兼公に對つて、

「お前がもしお父ちゃんからバテを貰つたのに、よその子が来てそれをとつたらいやだらう。」といふと、

「お父ちゃんはバテ持つてないよ。」

吉藏は口に手をあてよくすく笑つてゐた。

お芳は、恐い顔をして吉藏を視て、それから兼坊の方へ向いて、

「ぢやね、もしお父ちゃんがお前に豆板をくれたときに、よその子が来て半分持つてつてしまつたらいやだらう。」

「そうしたら、あたい、その子の鼻を打つてやらあ。」と兼公は勇猛にいつてのけて、窓のところへいつて街燈の點せられ

るのを眺めてゐた。

「だつてもしその子がぶち返してお前を倒しちまつたらどうする。」

「あたひ打たせないよ。お父ちゃんはこのごろちつとも豆板くれないなあ。」と肩越しに兼公がいつた。

「兼ちゃん、お前だん／＼いけなくなるね。」と母親は嚴かな聲でいひ出すと、父親が、

「だが、この子は良い子だよ。」と小聲で遮つた。

「お前さんは黙つておいでなさい。」と靜に夫に答へておいて「この子は良い子ぢやありませんよ。だから、お前さんはこの子の言ふ事を笑つたり甘やかしたりしないですこしなぐつてもやればいゝのに。」

「おら、子供をなぐつたことはねい。それに……。」

「お前さんは兼坊をなぐつた事がないからこんなありさまになるんだ。なんでも、したいまゝにさせておくから、この子は悪い事をしてゐると思はないんだもの。子供はすこしは抑へなくてはいけない。」

「そんなら、どうすればいゝんだい。」

「あんな瘦こけた初ちゃんみたような子を兼公がぶつたりバテを横取りしたんだから叱つておやんなさい。」とお方は聲低くいつた。

兼ちゃんは、鼻の上へバテをとつ付けて、窓のところから戻つて來た。

「お父ちゃん、こら、あたひの鼻！」と両親の今までの談話にまるで無頓着に、暗やかにいつた。

吉藏は噴き出してしまつた。お方は、

「そんなものすぐ脱つておしまい。」と怒鳴つて「お前さんはほんとに呆れたひとだね。この子の悪戯を笑つて見てゐるなんて。お前さん覚えてゐないの、小倉のおかみさんとこの人が話したぢやないか、自分は子供のときに鼻の上へバテを載

せたんでこんなに鼻が碧くなつたんだつて……おとりつていへば、兼公いふ事きかないかい。」

兼公はたいして閉口もせず、窓のところへ戻つていつて母を怒らせたパテを取り去つてこんどはそれを丸めて、たのしみさうに指でキヌウ〜押しつぶしにかゝつた。

「お前さん、あたしの言つた事をしないの。」

吉藏は、なさけなさうに、

「おれには出来ないよ。……千代坊が目を覺ましてもいけないからな。」とそれを頼みの綱にと言ひ足した。

「兼坊を……なぐれといふつもりでもないだよ。たゞね、いつまでも忘れないやうに何とか身にしてみるようにしなくちやいけない。威張つたり、ひとをいぢめたりさせちやいけないから。ね、さうだらう。」

「だつて、どうすればいゝんだ。」

「かうしたらどう？ お前さんがその料理臺のところへ行つて小抽斗をあけてね、今朝あの子につて買つて來た豆板を出して……お前さん聽いてるの？」

「きSてるよ。」

「そして兼公にかう言ふの。お前はおとなしかつたから、土曜日のおたのしみにとこの豆板を買つておいたのだが、ちつともおとなしくないから、一つもやらないつて。」

「それや、ひどいや。」

「そして、その豆板を包んでね、これを横町の初ちやんのとこへ持つていつて、初ちやんにやつてそしてパテも返しておSでとSふの。」

「それや、ひどいや。」

「そうすると、兼公は自分より弱いものを打つたりしちや悪いつて事が分るんだよ。お前さんだつて大きな子供が兼公を打つたら腹が立つだらう。」

「それやそうさ。……だがな、兼坊はあんなに豆板が好きなんだから……」

「まあ、この人は兼公のためつてことを思はないのかね。それだか 我儘になるんだよ。お月様が欲しいつて泣けばお前さん取つてやる氣なんだらう。」

「お前の言ふことは尤なんだらうよ。だが、おれにや出来ぬ事をしろつていふんだからな。豆板を半分初ちやんとこへ持つて行けつて言つたらいけないかい。」

お芳は頑として、

「そんな事は駄目く。おい、兼坊。」と悴を呼んで、

「お父ちやんが用があるつて……さ、お前さん……」

吉藏は大きな溜息を一つ吐いて、起ち上り、料理臺の抽斗のどこへ行つて豆板の包みを持つて來た。

兼公は、何の頓着もなく、

「お父ちやん、あたゐ、パテより豆板の方が好き。」

父親は、歎願するように母親の顔を見たが、母親の決心は巖のやうに堅かつた。彼女は再び針を手にしてゐたものゝ父子二人の様子に眼を配つてゐた。

吉藏は、當惑さうに、

「兼公、何故あんな弱い初ちやんを打つたんだい。」

「パテがすこし欲しかつたら。」



「さうか。」と吉藏は言つたまゝ暫時黙つてゐて「打つたりして悪るかつたと思ふだらう。」

「うゝん。あたゝい、バテを取つたもの。」

「悪るかつたと思 なければいけない。」

「どうして? お父ちゃん。」

「初ちやん泣いたらう。」

「あゝ、泣いた。」

吉藏はこの場を何とかして貰はうとお芳の方を眺めるけれど、お芳は精出して縫つてゐた。

「それでな。」と父親は途切れ／＼に 母ちやんも、父ちやんも、お前が初ちやんに るい事をしたんで怒つてるんだぜ。」  
初ちやんのやうな子をぶつなんで卑怯なもの。」

兼公の顔は心配さうになつて來た。

父親は、

「母ちやんが： 母ちやんが言ふにはな……。」

「お前さん、しつかりおしよ。」とお芳は警告した。

「母ちやんも父ちやんもな、今日はお前に豆板をやるまいつていつてるんだ。」

兼公の下唇は深へながら突き出て來た。

「でな……お前、豆板を初ちやんにやつてそしてバテも返してくるんだ……そして……そして……お芳……おれあ……も  
う言へない。」

父親の言つた事が、兼公にのみこめるまでには一二秒かゝたが……いよ／＼解つてしまふと、兼公は低い聲を揚げて泣

き出し涙をポタ／＼落し初めた。

吉藏は兼公を抱き上げやうとしたが、お芳はそれを避つて、物靜かに

「さ、帽子、被つてね兼公、豆板とパテとを初ちやんとこへ持つておいで。まだ日は暮れないから。」と窓の外を見やりながら付け足した。

「あたい、初ちやんに豆板やるのいや。」と兼公は泣いた。

「言ひ付けられた通りにするんだよ。」と母親は穩かに、優しく答へた。「お前、泣蟲ぢやないだらう。」といひ／＼涙を拭いてやつて「お前、男になるんだつたね。お前が泣いてるのを見ると初ちや が何ていふだらう、エ、兼坊。」

お芳の言葉は思ふ的にあたつた……兼公は忽ち泣くのを止めた。息だけはまだせか／＼させてゐたが、帽子で涙をふいてそれをすぐ頭にかぶつた。

「あたい、豆板とそれからパテもやるの。」と彼は衰れ氣な聲で尋ねた。

「あゝそうだよ。そして打つたりして御免よつていふの。初ちやんは、お前のやうな丈夫な強い子でないんだから……よくそれを覚えておいで。お前が初ちやんみたやうに足が悪るかつたりすると、お父ちゃんも、母ちゃんも心配するからね。」

「あたい、仲よくなりたくないんだ。行きたかないや。」と兼公は、反抗氣味に答へた。

「初ちやんが恐いのかい。」とお芳が尋ねた。

「またもや、うまく矢が當つた。」

「恐いもんか。行つてくる。」

「偉い！」と今まで黙りこんで暗い顔をしてゐた吉藏が怒鳴つた。「お前が恐がるもんかなあ。」

兼公は、何だか大勇者にでもなつたやうな気がした。威張つた態度で無言のまゝに、豆板の包み（母親が針箱から細紐を探してしれかり括つてくれた）を持つて出掛けていつた。

吉藏は、氣遣はしさうに妻を見た。

お芳は、また針仕事にかゝてゐたが、指先はさう早く動かなかつた。夫婦はたび／＼時計を眺めた。

「五分位しかかゝるまいに。すこし酷くやりすぎたんぢやないかな」と吉藏が言ひ出した。

お芳は返辭をしなかつた。そして十分ばかり過ぎると「兼坊はあの通りするんだらうかな」と吉藏がまた話しかけた。

「するともさ。」とお芳は、暢氣な風を装つて答へた。

「おら、一所にいつてやればよかつたな。」

お芳は黙々として六針程縫つたが、

「お前さん、一寸いつてあの子が何してるか見て來たらどう。」と言つた。

「そうしよう……どうだらうなお芳、戸外へ出たついでに、すこし豆板を買つてやつちや。」と遠慮がちに伺ひを立てた。

お芳は縫物から顔をあげて、やさしく、

「買つたらいゝでせう。坊も解つたらしいから。あの子は子供にしちや中々自尊心がつよいね。」

「あゝ、うちの兼坊みたいな良い子はめつたに無いや。」と妻にうなづいて見せて出ていつた。

二十分程経つてから父子が揃つて戻つて來た。二人とも大にこ／＼の態だつた。

「兼公が初ちやんと別れないで困つたよ。」と吉藏が微笑み／＼話した。

「おや、さうだつたの。」とお芳も上機嫌で「兼ちやん、お前豆板とパテとを初ちやんに渡したの。」

「あゝ渡した。」

すると母親は兼坊を抱き上げて可愛がりながら、

「お前さん、すこし豆板をやつて下さい。」といつた。

吉藏は大喜悅で、たつぷりと豆板をやつたから、兼公は、心のゆくかぎりお腹へつめこんだ。

「お前どうしてあんなにいつまでも初ちやんとこにゐたの。」とお芳は愉快さうに訊いた。

「初ちやんね、あたいにパテの大きな塊をくれたよ。」と兼公はオレンチ程の大きさを出して見せた。

「あら！」といひながらお芳は厭さを見せまいと努めた

「そしてね、あたひ、初ちやんと豆板たべたの。」と兼公が言ひ足した。

# 編輯だより

◇入學に子等の心ををどる。

百花ほしゑみ、地が歌ふ、春は今酣である。灌佛會、復活節、永  
久のよろこびが春から生れる。

◇外遊び。子供が一ばんよろこぶことで、子供の爲に最もよい事、

よき、子等の友は早くかゝい屋根の下を離れるべきである。殊  
不幸な都會の子等の爲に、大きな力が動かればならぬ。

◇各方面からの幼稚園だよりを歓迎いたします。

御注意	廣告料		定價表		冊數	定價	郵
	表紙裏付	表紙裏付	十二冊(前金)	一冊(前金)			
(外國行郵税は一部十二錢の割にて御拂込下さい) △本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金にて御 金下さい(東京四六番臺壹番教文書院宛)郵券送金の節は 前金切れの節は帯紙に「前金切」と致します。 △郵券送金の節は一割増で一錢切手に致します。 △本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	前近面一頁	金四拾五圓	金七拾圓	金貳圓拾錢	金參拾五錢	金	
		同	同	不	不	不	

大正十四年四月十一日納本  
大正十四年四月十五日發行  
第二十五卷第四號

編輯者 東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會  
堀 七 藏

發行者 東京市下谷區上根岸八十八番地  
越 元 新 吉

印刷者 東京市京橋區木挽町二ノ一三  
石 上 文 七 郎  
印刷所 教文書院印刷部

無斷 轉載 禁止

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

發行所 教文書院

電話下谷三〇四七番・一九五一番  
振替東京四六一一一番

第二十五卷第四號（每月一回十五日發行）

大正十四年四月十日印刷  
大正十四年四月十五日發行

定價金三十五錢

院書文教